

NHIỀU TÁC GIẢ

KỶ YẾU HỘI THẢO QUỐC TẾ CHUYÊN NGÀNH GIẢNG DẠY NGÔN NGỮ VÀ VĂN HÓA NHẬT BẢN



NXB ĐẠI HỌC HUẾ



JAPAN FOUNDATION
国際交流基金

フエ大学外国語大学
TRƯỜNG ĐẠI HỌC NGOẠI NGỮ, ĐẠI HỌC HUẾ

国際交流基金
QUỸ GIAO LƯU QUỐC TẾ

NHIỀU TÁC GIẢ

論文集

国際シンポジウム

「世界とのつながりの中で考える日本語の未来：可能性・課題・戦略」

KỶ YẾU

HỘI THẢO QUỐC TẾ CHUYÊN NGÀNH GIẢNG DẠY NGÔN NGỮ
VÀ VĂN HÓA NHẬT BẢN

(BẢN MẪU)



NHÀ XUẤT BẢN ĐẠI HỌC HUẾ

DMI Huế



ISBN: 978-632-627-289-5



Sách không bán



JAPAN FOUNDATION
国際交流基金

フエ大学外国語大学

TRƯỜNG ĐẠI HỌC NGOẠI NGỮ, ĐẠI HỌC HUẾ

国際交流基金

QUỸ GIAO LƯU QUỐC TẾ

NHIỀU TÁC GIẢ

論文集

国際シンポジウム

「世界とのつながりの中で考える日本語の未来 :

可能性・課題・戦略」

KỶ YẾU

HỘI THẢO QUỐC TẾ CHUYÊN NGÀNH GIẢNG DẠY
NGÔN NGỮ VÀ VĂN HÓA NHẬT BẢN

NHÀ XUẤT BẢN ĐẠI HỌC HUẾ

Huế, 2026

Biên mục trên xuất bản phẩm của Thư viện Quốc gia Việt Nam

Kỷ yếu Hội thảo quốc tế chuyên ngành giảng dạy ngôn ngữ và văn hóa Nhật Bản =国際シンポジウム「世界とのつながりの中で考える日本語の未来：可能性・課題・戦略」 / Le Cam Nhung, Pham Thi Tham, Nguyen Kim Thu... - Huế : Đại học Huế, 2026. - 296 tr. ; 27 cm

ĐTTS ghi: Trường Đại học Ngoại ngữ, Đại học Huế; Quỹ Giao lưu Quốc tế Nhật Bản. - Thư mục cuối mỗi bài

1. Tiếng Nhật 2. Phương pháp giảng dạy 3. Kỷ yếu hội thảo
495.680071 - dc23

DUM1101p-CIP

Mã số sách: NC/54-2026

目次／MỤC LỤC

I. 主催者挨拶 ／ Diễn văn khai mạc Hội thảo

フエ大学外国語大学 学長 ファム・ティ・ホン・ニユン

国際交流基金ベトナム日本文化交流センター所長 吉岡憲彦

II. 基調講演 ／ Báo cáo đề dẫn

No.	内容／Nội dung	発表者/ Người trình bày	ページ /Trang
1	ベトナム語話者の日本語接続詞の習得過程 —日本語学習者縦断作文コーパス W-CoLeJa を用いた分析—	石黒 圭 (国立国語研究所)	18
2	異文化間語用論の可能性	小野正樹 (筑波大学)	30

III. 研究発表 ／ Báo cáo tiểu ban

No.	内容／Nội dung	発表者/ Người trình bày	ページ /Trang
1	連携性のある日本語教育カリキュラム実施の必要性と課題 —日越大学における日本語既習者への対応からの考察—	LE Cam Nhung PHAM Thi Tham (日越大学)	38
2	視覚障害者のための初級 (A1) 日本語能力評価試験に関する研究 —ハノイ大学日本語学部を事例として—	NGUYEN Kim Thu (ハノイ大学)	46
3	楽しい日本文学授業 —社会的な側面も育むアクティブラーニング活動への調査から—	NGUYEN Thi Hong Ngoc (ダナン大学外国語大学)	55
4	日本語—ベトナム語逐次通訳の授業における学生のピア・フィードバック認識の変容：内省シートに基づくプロセス研究	NGUYEN Song Lan Anh (ハノイ大学)	67
5	ベトナム小学生における日本語教育の関係 —アクセント指導を通じたコミュニケーション能力の育成—	NGO Thi Kieu Nga (国際交流基金・在ベトナム日本文化交流センター)	77
6	現代日本の文化におけるソフトパワー：マンガ『ONE PIECE』のグローバル文化交流および言語学習動機付けにおける役割	VU Viet Nghia VU Minh Hieu (ハノイ国家大学)	88

7	ベトナムの日本語教育における「語用文化」指導の課題と展望 —言語文化統合型アプローチの視点から—	VU Minh Hien (ハノイ大学)	99
8	ベトナム人日本語学習者における AI ツール使用に関するアンケート調査 —日本語授業における AI 活用と学習者の自律性との両立を目指して—	HOANG Thi Lan Nhi (フエ大学外国語大学) DO Bich Ngoc (九州大学大学院)	104
9	日本文学科目における PBL と Canvas (LMS) の実践 — デジタル技術を用いた学習意欲向上 —	THAM Thuy Hong (フェニカ大学)	115
10	中級日本語聴解教育における ChatGPT の活用 — Bruce Joyce & Marsha Weil の教育モデルによるアプローチ	DU Thoai Tu (ダナン大学外国語大学)	127
11	2 人、2 年間で、2 か国語 : 理解可能なインプットによる言語習得に関する研究	BUSHNELL Cade (筑波大学) NGUYEN Xuan Nguyen Hanh (フエ大学外国語大学)	138
12	カナ文字の指導・学習における反転授業法の活用と学習ストラテジー	NGUYEN Huyen Ngoc NGUYEN Thi Ha (東アジア工科大学)	152
13	日本語学部 2 年生のライティング実践における AI を活用した言語支援ツールの利用の利点と課題	NGUYEN Khanh Chi (ハノイ大学)	164
14	日越逐次通訳教育における生教材の活用	LUONG Hai Yen (ハノイ大学)	174
15	オンライン日本語コメントの言語的な特徴 - 文末表現を中心に -	TRUONG Thi Mai (フェニカ大学)	186
16	日本語自然会話における共同的発話現象の一類型としての「引き継ぎ」 — 「割り込み」との比較 —	NGUYEN Thi Ha (東アジア工科大学)	197
17	日本語とベトナム語における「言いさし」の対照語用論的研究	NGUYEN Doan Quang Anh (ヴァン・ラン大学)	209

18	「ごはん」の語用と認識—母語話者とベトナム学習者の比較調査	LE Thi Hong Van (フエ大学外国語大学) UTSUNOMIYA Yuka (学習院女子大学)	222
19	日本語とベトナム語における植物の単語を含む慣用句の象徴的意味に表れる文化・思考的特徴の対照	DO Phuong Anh (ハノイ大学)	229
20	フエ大学外国語大学日本語日本文化学部の学生における漢字の筆順に関する認識	LAI Huyen Ton Nu Khanh Quynh NGUYEN Thi Huong Tra (フエ大学外国語大学)	238
21	フエ大学外国語大学日本語日本文化学部の学生における相槌使用の課題と指導への示唆	DUONG Thao Vy TRINH Tran Ngoc Khanh (フエ大学外国語大学)	247
22	日本語とベトナム語における人称代名詞の表現の対照研究統合と発展のための理解	VU Thuy Nga (ダイナム大学)	257
23	フェニカ大学日本語学部二年生の日本語読解能力に関する調査	LE Ha Phuong (フェニカ大学)	267
24	現代日本語における「X々」型畳語について—ベトナム語との対照—	PHAN Gia Nhat (フエ大学外国語大学)	275
25	ビジネス日本語授業における共修学習の可能性	NGUYEN Thi Huong Tra DAO Thi Thuy Nhi NGUYEN Thi Vinh Tu (フエ大学外国語大学)	288

「ごはん」の語用と認識—母語話者とベトナム学習者の比較調査

LE Thi Hong Van*, UTSUNOMIYA Yuka**

フエ大学外国語大学*、学習院女子大学**

要旨

日本語母語話者とベトナム人学習者による「ごはん」の語用と認識について、Web アンケートを実施し、245 件分析した。母語話者は「食事全体」「白米」と認識し、学習歴や滞在歴が長いほど「家庭的な食事」「主食」も多用していた。「ごはんを食べに行こう」「食事に行こう」「飯に行こう」の違いは、学習歴が浅いほど十分に理解されず、「飯に行こう」を丁寧な言い方と誤認する傾向がある。一方、男性的で砕けた表現と理解していたのは滞在歴が長い学習者に限られていた。これは教科書で扱う表現の限界や、文脈に応じた語用習得が実体験に依存することを示唆している。

キーワード: ごはん、語用、母国語者、学習者、比較研究

Abstract

This study examined the pragmatic usage and perception of *gohan* (meal/rice) among native Japanese speakers and Vietnamese learners through a web-based survey of 245 responses. Native speakers primarily understood *gohan* as “a meal as a whole” or “cooked white rice.” Learners with longer study or residence experience in Japan tended to use it also to mean “home-style meal” or “staple food.” Beginners often fail to distinguish among “*gohan o tabe ni ikō*” (let’s go eat), “*shokuji ni ikō*” (let’s go for a meal), and “*meshi ni ikō*” (let’s grab some food), sometimes misinterpreting “*meshi ni ikō*” as polite. In contrast, learners with extended residence recognized it as a masculine and casual expression. The findings indicate limitations of textbook-based instruction and suggest that acquiring pragmatic competence in Japanese depends strongly on contextual and experiential learning.

Keywords: Gohan, Pragmatic, Native Speakers, Learners, Comparative Study

はじめに

米が主食の日本とベトナムにおいて、炊飯した「飯（ごはん）」は、日常生活で頻繁に使用される語彙の一つである。日本語で「ごはん」という語は、単なる食物を指すだけでなく、食事全体を象徴する語としても機能し、食事を誘う文言、挨拶にも使われるなど多様な意味合い、活用がされている。また、ベトナムにおいても類似した活用をしている。

本研究では、日本語母語話者とベトナム人日本語学習者を対象に、両国の食の実態、食文化の背景を踏まえながら、「ごはん」という語の語用的特徴および論的感覚（pragmatic sense）について検討する。具体的には、「ごはんに行こう」「食事に行こう」「飯に行こう」など、食事への誘いに用いられる表現のニュアンスの違いや語彙選択の傾向に着目し、両者が「ごはん」という語をどのように理解・使用しているかを明らかにする。また、場面や対人関係に応じた表現の使い分けに加え、日本語学習歴、日本滞在歴、日常的な食生活といった文化的背景が語用に与える影響についても分析を試みる。

調査方法としては、2025 年 9 月 30 日～10 月 3 日にかけて、オンライン調査ツール Qualtrics を用いて質問紙調査を学習院女子大学およびフエ外国語大学で実施し、10 代～60 代から 250 件の回答を回収した。データクリーニング後、有効回答 245 件を対象に、統計解析ソフト SPSS による定量分析を行い、さらに User Local を用いた AI テキストマイニングによって自由記述回答の語彙傾向を分析した。対象者の属性については表 1 に示す。

表 1 対象者

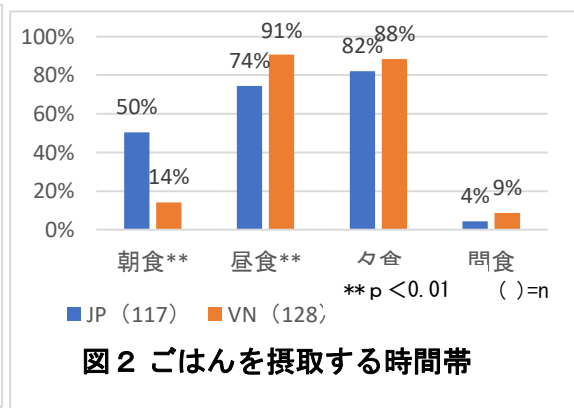
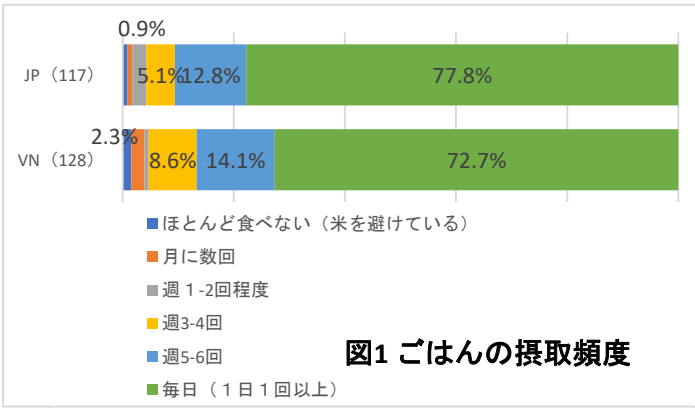
	年齢					日本語学習者 (VN)			
	20代以下	30代	40代	50代以上	合計	日本語学習歴	人数	滞在歴	人数
母国語が日本語 (JP)	83	8	3	23	117	0～6か月以下	5	日本に住んだことがない	103
	70.9%	6.8%	2.6%	19.7%	100.0%	7か月～1年間	18	6か月未満	7
日本語学習者 (VN)	115	9	3	1	128	1年～2年未満	47	7か月～1年間	5
	89.8%	7.0%	2.3%	0.8%	100.0%	2～3年間	28	2年以上	13
合計	198	17	6	24	245	4年以上	30		
	80.8%	6.9%	2.4%	9.8%	100.0%	合計	128	合計	128

研究内容

1. 食の実態—ごはんの摂取頻度と食べる時間帯

「ごはん」という語の語用的感覚や食事誘導表現（ごはんに行こうなど）を理解するため、両国の食文化・生活習慣について、ごはんの摂取頻度と食事時間帯に関する調査をした。

ごはんの摂取頻度について、毎日（1日1回以上）摂取する割合は、日本語母語話者（以下 JP）で 77.8%、ベトナム人日本語学習者（以下 VN）で 72.7%、全体で 7 割以上である。週 5～6 回も JP で 12.8%、VN で 14.1%と比較的多く、週 5 回以上の高頻度層が全体の約 9 割を占める。一方、低頻度層（週 2 回以下）の割合は非常に少なく、JP では 4.4%、VN では 4.7%で、米を意識的に避ける層は少数派である。日本ではパン食が年々増加し、米離れが問題となっているが、両国において「ごはん」は高い頻度で摂取される主食であることが明らかとなった。



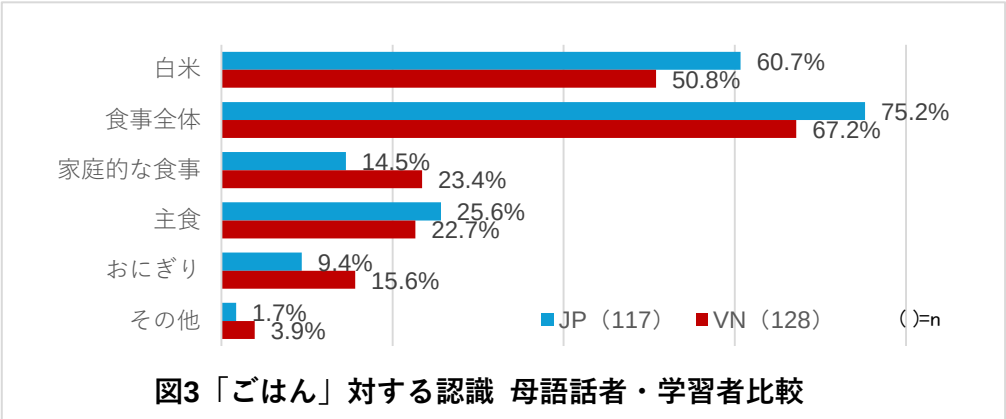
次に、ごはんを摂取する時間帯について複数回答で調査した。その結果、昼食・夕食での摂取が両国とも高い。昼食の摂取率は、VN が 91%、JP が 74%と、VN の方が有意に高い。夕食では JP が 82%、VN が 88%と、いずれも 8 割以上であり、昼・夕食が米の主要な摂取時間帯であることが確認される。一方、朝食に関しては、両国で大きな違いが見られた。日本では「ごはん（米飯）」を朝食に食べる人が 50%に対し、ベトナムでは 14%にとどまった。これは、両国の食文化の違いを反映している。日本では朝に白ごはんを主食とすることが多いのに対し、ベトナムでは米粉を使った麺料理やバインミーを朝食にとることが多いのだ。間食として「ごはん」を摂取する割合は、両国ともに低く、飯は主に食事として位置づけられていることが示された。ただし、日本では 4%、ベトナムでは 9%と、わずかながら間食としての摂取が見られた。この背景には、おにぎりの存在が考えられる。日本ではコンビニエンスストア等で手軽に購入でき、ベトナムにおいても、昨今、屋台や店でおにぎりや海苔巻きが販売されている。

以上の結果から、「ごはん」が両国の食文化において主食としての地位を確立しており、食事時間帯や摂取習慣では、文化的差異があることが浮き彫りになった。

2. 「ごはん」に対する意味認識

2.1. 「ごはん」の意味認識に関する日越比較

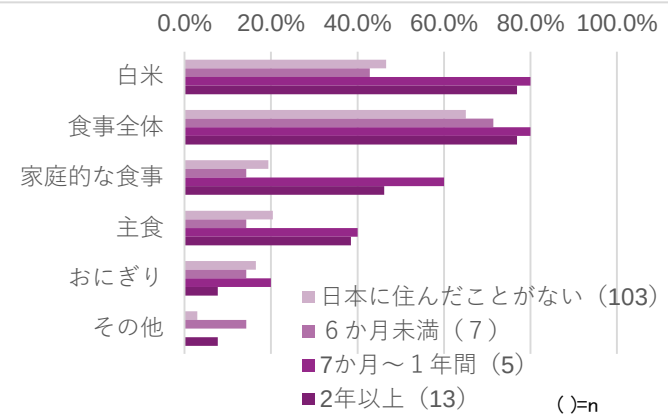
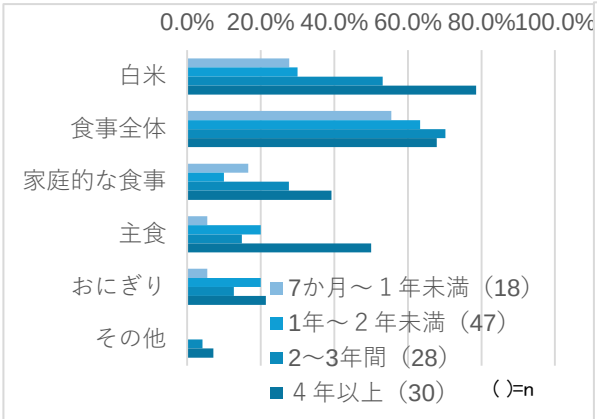
「ごはん」に対して、母語話者（JP）は食事全体（75.2%）、次いで白米（60.7%）という認識で、学習者（VN）も食事全体（67.2%）、白米（50.8%）で同じような傾向である。しかし、家庭的な食事では、JPが14.5%に対してVNが23.4%と学習者の方が高い。ベトナムではごはんを家族で囲んで食べる習慣が根強くあり、学習者が「ごはん」に対して、家庭的・親密なイメージを持っていると思われる。また「おにぎり」も母語話者よりやや高い。三角形の特有な形状をした「おにぎり」は、ベトナム人の学習者にとって日本の食文化の象徴的食品として捉えている可能性がある。



2.2. 「ごはん」に対する意味認識の変化：日本語学習歴・滞在歴による比較

次に、日本語学習歴および滞在歴によってどのように変化するかを検討した。日本語学習歴については、6か月未満5名を除いた7か月～1年、1年～2年未満、2～3年、4年以上の4群で、滞在歴は日本に住んだことがない者（以下、未滞在群）、滞在歴6か月未満、7か月～1年、2年以上の4群でそれぞれ比較をする。

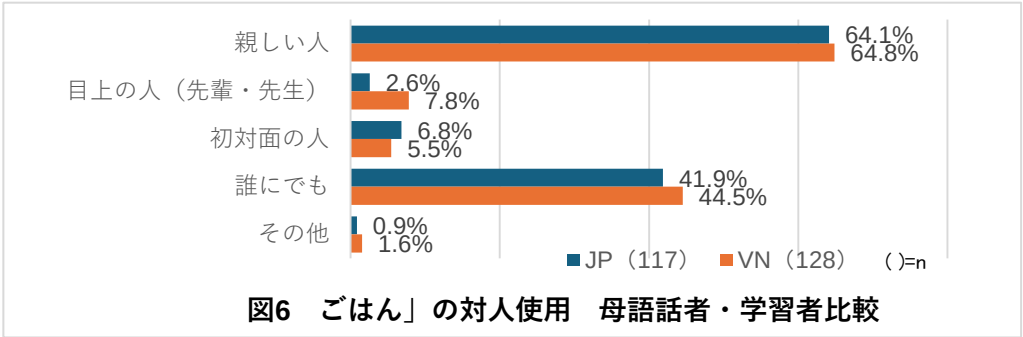
その結果「食事全体」としての認識が、学習歴・滞在歴が長いほど、徐々にその比率が高くなる。一方、「白米」としての認識は、学習歴2年以上および滞在歴7か月以上の群で高く、それ未満の群との間に顕著な差異が見られた。また「家庭的な食事」や「主食」としての認識についても、同様に傾向が示された。この結果は、「ごはん」という語の意味が、一定期間の言語学習および文化的接触を通じて多義的に理解されるようになることを示している。



3.1. 「ごはん」の対人使用に関する日越比較

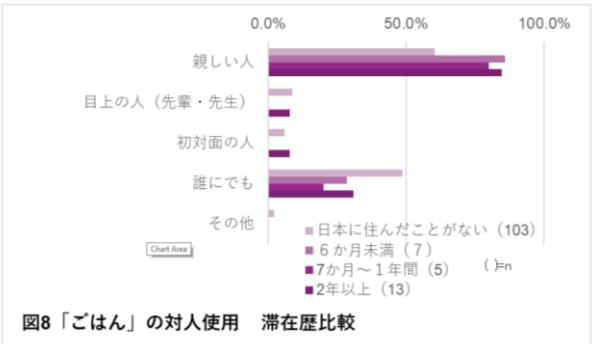
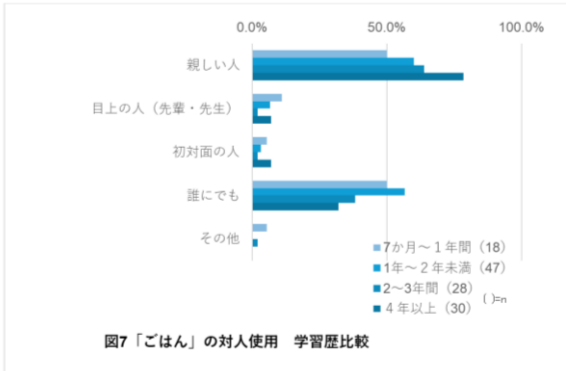
どのような相手に対して「ごはん」という言葉を使用するのか調査した。その結果、「親しい人」に対して使用する割合は、JPが64.1%、VNが64.8%とほぼ同等であり、「ごはん」が親密な関係性で用いられる語であることが共通して認識されていた。「誰にでも」を使用するという回答も比較的高く、JPで41.9%、VNで44.5%であった。これは、「ごはん」が日常語として広く使われる語であり、場面によっては丁寧さよりも親しみやすさが優先されることを示している。

「初対面の人」への使用は両者ともに低く、JPで6.8%、VNで5.5%である。これは、「ごはん」が親密さを前提とした語であり、初対面では使用を控える傾向があることを示している。一方で、「目上の人」への使用はJPで2.6%、VNで7.8%と、有意差はないもののVNの方がやや高い傾向にある。VNでは「ごはん」を「御飯」として「御名前」「御家族」と同様に「飯」に対して丁寧さを表現していると捉えられている可能性もある。それらの差は、敬語体系への理解や語用的距離感の違いを反映していると考えられる。



3.2. 「ごはん」の対人使用に関する日本語学習歴・滞在歴による比較

日本語学習歴および日本滞在歴の比較において、学習歴・滞在歴が長い人ほど、「親しい人」に対して使用する割合が高く、逆に「誰にでも」の比率は、学習歴が2年未満、滞在歴が6か月未満の比率が高いことがわかった。すなわち「ごはん」は親密な関係性を前提とした語として認識される一方で、学習初期や滞在経験の浅い層では語用的判断が未成熟であり、語の使用における社会的文脈の理解が習得過程に応じて変化することが明らかとなった。



4. 食事への誘い「ごはん食べに行こう」「食事に行こう」「飯に行こう」

4.1. 食事への誘いにおける日越比較

食事の誘いについて、「ごはん食べに行こう」という表現に対する印象および、それと比較される「食事に行こう」「飯に行こう／飯喰いに行こう」との語用的差異について、自由記述で回答してもらった。得られた記述データに対して AI テキストマイニングを行い、出現頻度お

分析の結果、「ごはん食べに行こう」は、JP・VN の両者において「親しみやすい」「気軽」「カジュアル」といった語が多く見られ、日常的かつ親密な関係性を前提とした誘い表現として認識されていることが明らかとなった。特別な場面ではなく、日常的な食事を共にする場面が想起され、また、親しくなりたい相手に対しても用いられる、距離を縮めるための柔らかな表現として機能している。

「飯に行こう」「飯喰いに行こう」については、JP では「男性的」「親しい間柄限定」「品がない、雑」といったイメージが挙げられ、親密な関係性の中で用いられる一方、粗野な印象やジャンクフード（例：ラーメン）を連想させる語として認識されていた。VN においても、「くだけた」「男性同士の友人関係で使う」「荒っぽい」などの印象が共有されていたが、一部では「目上の人が年下に使う親しみのある表現」や「フォーマルな表現」と捉える回答も見られ、語用的判断における揺れが存在することが示唆された。

JP は表現の選択に際し、誘う相手との関係性や場面に加え、訪れる店の種類や食事内容までを具体的に想像する傾向があったのに対し、VN は使用する語によって相手との距離感や社会的地位を調整する意識が強いことがうかがえた。これらの結果は、食事に関する語用表現が文化的・社会的文脈に深く根ざしており、言語習得においてもその理解が重要であることを示している。



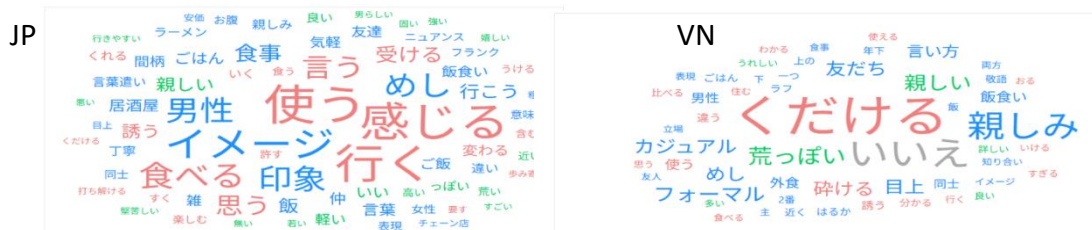


図 11「飯、喰いに行こう」母語話者・学習者比較

4.2. 食事への誘いにおける日本語学習歴・滞在歴による比較分析

学習歴が浅い学習者ほど、「ごはんを食べに行こう」「食事に行こう」「飯に行こう」「飯食いに行こう」などの表現の違いを十分に理解しておらず、特に「飯に行こう」「飯食いに行こう」を丁寧でフォーマルな言い方であると誤って認識する傾向がある。また、「飯食いに行こう」はカジュアルで男性的で砕けた表現であると正しく理解し、そう答えたのは、主に日本での滞在歴が長い学習者に限られていた。これは、教科書などで取り上げられる表現が限定的であること、または文脈に応じた言語使用の習得が、日本語使用の実体験に依存することを示唆している。

ただし、日本への渡航歴がない場合でも、アニメや漫画などを通じて日本の日常生活に関する情報を得て、語用的な使い分けを適切に理解している者もいた。また、授業外の日本語学習の実態について自由記述形式で調査を行った結果、回答者 128 名のうち、アニメ・漫画を通じた学習が 52 件、YouTube が 23 件、映画による学習が 19 件確認された。言語教材と共にこれらを効果的に活用していくことが、日本語教育において有用であると考えられる。

実際、フエ外国語大学日本語日本文化学部の 1 学年約 250 人の学生のうち、20 人程度、つまり 10%未満しか交換留学等を通じて日本へ行く機会がない。残りの 90%以上の学生は、どのようにして自然な日本語を身につけることができるだろうか。アニメや漫画などを単に趣味として日常的に視聴しているが、そこから意図的に日常生活に関する情報を得ている学生は決して多いとはいえない。したがって、授業の中でこれらの教材を活用することが望ましい。たとえば、読解の授業に漫画を、聴解や通訳の授業にアニメを導入するなど、アニメや漫画を学習内容に取り入れることを提案したい。一学期に数冊の漫画を読む、またはいくつかのアニメやドラマを視聴することを課題とし、その後に内容の要約や感想を書かせることで、読む・聞く・書く・話すの 4 技能を総合的に鍛えることができると考える。

おわりに

本研究では、日本語母語話者とベトナム人日本語学習者を対象に、文化的背景を踏まえながら、「ごはん」という語の意味認識と語用的使用について比較調査を行った。分析の結果、「ごはん」は日越で共通して主食としての地位を確立している一方で、食事時間帯や語の使い方には文化的差異が見られた。「ごはん」に対する意味認識は、日越ともに「食事全体」「白米」が中心だが、学習者は「家庭的な食事」や「おにぎり」に親しみを感じる傾向があった。学習歴・滞在歴が長いほど語の理解は多義的に深化し、対人使用では「親しい人」に用いる認識が共通する一方、学習初期では語用的判断が未成熟であることが示された。

食事への誘い表現においては、「ごはんに行こう」が親しみやすく日常的な語として認識されるのに対し、「食事に行こう」はフォーマルな場面、「飯に行こう」は男性的かつ砕けた表現として理解される傾向があった。学習歴や滞在歴が浅い層では、これらの語用的違いが十分

に理解されておらず、誤認も見られた。ただ渡航歴がなくても、アニメなどの情報から語用的な使い分けを適切に認識している者も一部にいた。

これは、教科書中心の学習では語用的判断が育ちにくく、実際の使用経験が重要であることを示している。学習者が文脈に応じた語の使い方を習得できるよう、教材や指導法の改善が求められる。語用論的能力の育成には、文化的背景を踏まえた実践的な学習環境の整備が不可欠である。その具体的方策の一つとして、日本のアニメ、漫画、ドラマなどの大衆文化的コンテンツを学習内容に導入することを提案したい。

また細川（1997）によれば、言語能力と文化理解は、初級では生活習慣、中級では社会常識、上級では専門知識へと段階的に発展する。「日本人の暮らしと社会」をテーマに、学習者自身の生活と比較することで文化理解が深まる。さらに異文化理解とは「私にとっての日本とは何か？」という問いから始まり、日常生活の観察がその鍵となる。言語習得における「文化理解」とは、外側から与えられる知識ではなく、学習者自身が体験・観察・自覚することで初めて意味を持つという。

今後の課題として、語学学習に、こうした「内側からの文化」の発見を促すことが、真の異文化理解とコミュニケーション能力の育成につながると考える。

謝辞

フエ大学外国語大学および学習院女子大学で本調査に協力してくださった皆様に感謝申し上げます。

参考文献

- 伊集院郁子（2024）「日本語母語話者と日本語学習者の接続表現の比較——日本語・中国語・韓国語・英語を母語とする大学生の日本語作文を対象に——」『国立国語研究所論集』27: 95-113
- 細川英雄（1997）「言語習得における＜文化＞の意味について」『早稲田大学日本語教育研究センター紀要』9, 1-19
- 和田由里恵, 堀江薫, 北原良夫, 吉本啓（2008）「日本語学習者の依頼におけるポライトネストラテジー-日本語学習者の母語と日本語の比較」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』(3) 293～300

<著者>

レティ ホン ヴァン LE Thi Hong Van

修士 フエ大学外国語大学日本語日本文化学部講師

University of Foreign Languages and International Studies, Hue University

連絡先: lthvan@hufliis.edu.vn

主な研究分野: 日本語教育

宇都宮 由佳 UTSUNOMIYA Yuka

博士 学習院女子大学 国際文化交流学部日本文化学科教授

Faculty of Intercultural Studies, Department of Japanese Studies Gakushuin Women's College

連絡先: yuka.utsunomiya@gakushuin.ac.jp

主な研究分野: 食文化、生活文化、家政学